片山敏彦著作集 8

髮の旅

雲の旅

片山敏彦著作集 8
© 1972 Misuzu Shobo

1972年3月20日 第1刷発行

¥ 900.

著 者 片山敏彦（かたやま としひこ）

東京都文京区本郷3丁目17-15
発行者 北野民夫

東京都新宿区改代町24
印刷者 田中昭三

発行所 東京都文京区本郷3丁目17 郵便番号 113 株式会社 みすず書房
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

(第6回配本)

理想社印刷・鈴木製本

目　次

雲の旅……5
村里日記
胡桃の樹蔭……70
初雪……73
雪明りの暁……77
春のきざし……80
薔薇の枝の雪……83
螢……89
四季断想
早春……92

初夏随想……96
秋の断想……101
初冬日記抄……110
随想と小品
秋の素描性……116
高原の記……122
青い雲……130
夢……138
メールヒェン二題……142
冬の光の中で……147
回想
追憶の庭……152

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

フランスへの回想……155
エルザスの山間の光……165
旅でみるともしび……171
蓼科高原……178
永遠に母なるもの……187
幸福について
魂のよろこび……202
聖性の感覚について……223
信じること……237
永遠なもののまたたき……246
解説……森本達雄……247

雲の旅

雲は今日も旅をする。真昼の日に白く輝き、夕暮に薔薇色になり、空に血を流し、また星々の前を黙想して過ぎる。それはまた雨を降らし、稲妻と雷鳴とを生む。そして雲は消える。風に吹かれて透明な大気の中にほろびる。歴史の中に大理石の円柱がくだけ死ぬように、心の中に憧憬と歓喜と憂欝とが解けて消えるように空の雲も消える。

雲は音楽のようであり、雲は建築のようである。雲はまた、それ自体としてよりも反映として心に留まることがある。湖や海の上の反映として、室内の物の光に交り込む反映として、または或るとき或る人の眼の光に宿る虹の色の反映として。

雲は他郷をさまよう者に故郷を想わせ、故郷の土の上で仰ぎ見る者に他郷へのさまよいを想わせる。

雲は愛を抱く者に遠い存在の姿を感じさせ、憎しみを持つ心を佗しさの影で撫でて過ぎる。

雲は月の周りで山に似ており、太陽の周りで波に似ている。

*

現実が夢より美しいということは、存在の論理的発展が主観的憧憬の論理よりも美しいことである。真に美しいものとは私にとって理性的であると同時に偶然的・驚嘆的なものである。しかし実際の夢は理性的でなく生理的な匂いをもっている。主観の夢の連鎖が客観的なものにさえぎられ破られることは主体にとって苦いことである。既成の調和がそのとき砕かれて、他異なものがわが風土へ侵入する。しかしその時、私の悩んでいる傍で、時間の底に（中心に）存在の論理の発展する場所が作られる。そのとき主観が他異なる衝撃から生じた本能的憎悪を内部から破る愛――展望力となるような愛を用意し、苦悩の中からあたらしい悦びの生まれ出るのを見ることができれば、そこに必然と自由とが協力して作る実在の論理の発展がある。この発展は主観の転身を条件としており、この運命的な条件を充たす転身が解脱への一歩前進である。

*

フィディアスは形の威厳を生みつつ太陽の前にひざまずく。
ソフォクレスは憂欝のヴェールの奥に人間の愛の灯をともす。
芭蕉は自然の風のまにまに銀河まで飛ぶ草の葉のようである。

*

幼児の顔に照るとき新月の光はふしぎに人間的である。

*

悩む自分、悦ぶ自分、酔う自分、妥協する自分、それらを見ている自分をさらに見ている自分がある。その見ている自分を理性的な自分だと感じる自分がある。すなわち理性的な自分を成立させる感情がある。

蚕が糸を吐くように自分が自分を吐く。しかし自分が自分を吐くのは自分に対立しつつ自分の運命であり歴史であるような存在がつねに在るからである。抵抗が同時に吸収であることは運命の特徴である。

*

芸術品の持つ真の若さとは詩的な若さであるが、われわれ自身が若いときにはかえって詩の若さはほんとうには理解されにくい。詩の若さは育ち成熟する若さである。時の流れに洗われるにつれて詩の若さもわれわれの眼前にはっきりと輝いてくる。たとえばリルケは彼の遺言的な作品『オルフォイスへのソネット』の中で、なんという驚くべき成熟した真の若々しさを実現したことだろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

*

未来の中に真の読者を持つことを望むのは、真の若さに対する詩人の本能である。

真の若さ、理性をふくむ若さを獲得することは創造的運命の充足にほかならず、芸術家はしばしばそのためには自己へのヒロイックな克己主義を取り直さねばならぬ。

芸術的な若さは音楽的な若さであり、理性をふくむ弁証的な展開を包む立場から生ずるが、生理的な若さは必ずしも音楽的ではなく、多くの場合に素材的に留っている。

死と距離との善行

憎しみと遺恨とを眠らせることは死の善行である。自分から距離の遠い、地球の向こう側の作家に対して、とくに心置きなき礼節の態度を批評家にとらせることは距離の善行である。

*

知性をふくまぬ感情は、知性をふくんでいる感情を感情として感じない。

*

我の発見は我の否定と忘却とを前提とする。

*

悦びでも悲しみでもない純粋な流れのような音楽がある。それに心を委ねているときの幸福。

*

知性への沐浴はいっそう乾くための沐浴である。

*

秋風が夏の明るい憂欝の中から生まれる。——影を透明にするために、そして樹葉に金色と今年の死とを与えるために。

*

今日、日本の音楽の未来にとってもっとも必要な存在は、真の音楽魂を持っている敬虔な音楽教育的な人々であろう。一人のセザール・フランク、一人のブゾーニ、一人のアルベール・ドワイヤンのような存在が必要である。日本の音楽に欠けているのは理論以上に魂である。魂がめざめるなら良い音楽理論は必ず成長してくる。

*

夏の正午の風が四周の山の碧い懐(ふところ)から笑い輝いて舞い立つ。山々は暗緑に金色に淡紫に真昼の山肌の編物をひろげ、重なる山脈の静寂の底に、一つの頂きを包む雪が眩しい三角形にそびえている。

夏の真昼の風が湖上をすべり、山から山へ渡る透明な鳥どもの無数の翼のように、風は深いみどりの水上に数かぎりない正午の無言の光の点を呼びさまし、消し、また呼びさます。

額の上で風が呟く。

「お前は私と波と山々との揺れるのを感じている揺れる影である。お前一個の苦を忘れ得ずに私たちの明暗を見つつすべって行く影である。

私たちの明暗の中にふるえている喜悦を今お前が感じたとすれば、それは私たちの永遠さの透明な絃を、お前の影の指がいま偶然ひいたからだ。」

*

フローレンスの建築を愛したニーチェは当時のドイツ大都市の建築を建築的罪悪と呼んだ。もしもニーチェのいうとおり趣味(ゲシュマック)が真に自己保存の本能だとしたら、われわれもみずからの自己保存について反省しなければならぬ。

*

スカルラッティーの音楽は私にルカ・シニョーレリの絵を連想させる。熱烈な素朴な甘美な一種のぎごちなさがある。それが初期ルネサンスの画家たちのあの堂々たるぎごちなさを思わせる。それは内面的な美に仕えている。

バッハにはしばしば懺悔の心の過程に似た力と美がある。それは一種の「精神分析」(Psychoanalyse) の過程のようである。

*

物が示す物の音楽。

物がユークリッド的でなくなり、感覚現実の次元ともいえなくなり、物から「愛」がはみ出て物をデフォルメして、静かに踊る、物の心が燃えて。

*

十一月の時間——春と秋とが囁き合っているような、千切れた雲の肩だけが橙色(だいだいいろ)になって、しかしどの雲も灰色の憂欝を持って空を飛んでいる。空が枝の間にサフラン色に青い。春の愛を急に思い出している秋の日。落ちる褐色の葉が、時間を我に還らせる。

*

はじめて読む人のたった三ページの文章の中に突然旧知の存在のようなしるしを見いだす悦び。私はこの文章を書いた人がどんな人かまったく知らない。

Les choses——sont contenues comme un ciel avant l'orage, elles sont là ; immobiles, pour chanter.

「物たちが、嵐の前の一天空のように湛えている。物たちは不動に実在している！　歌うために。」

こんな文を書く人の精神の系譜がいろいろ想像される。プラトンの「記憶」ということが思われ、それを思っている瞬間私は救われている。しるし（signe）とは回想への合図である。

*

音楽は未来の中へ打たれている網だ。そしてときどき引き上げられると見事な魂が網の中で踊っている。モーツァルトの網から岸へ引き上げられたプルーストやジューヴ、そしてヘッセ……

*

軽いと思ったものが重くなり、重いと思ったものが軽くなる。——これは月日が私の意識に及ぼす

もっとも大きい作用の一つだ。

この作用に対して、夜の眠りの時間にはたらく法則について、私は誰に教えを乞うたらいいか？

*

分類すると解りやすくなるが分類した瞬間に最初の誤りをやらなければならない知識の宿命。

*

ヴァージニア・ウルフの『波』を読む。

時の流れの中に明滅する記憶の諸象が互いに絡み合って不思議な一現実を作り出している。スーラの画面を統一する夢の力を連想した。

題材としての現実の現実性が軽んじられ、それらは時の彼方にかすんでいる。現実的計量の世界が忘れられると、記憶が計算と選択とを始める。別の目的性が、時を軸にして生ずる。現実のものの軽重がここでは変わる——死に近づいた人の意識の中で価値が転換するように。

美の太陽がどこからか、この夢のあたらしい世界を照らす……厚みを持たぬ、しかし不思議に強い網のような世界が広がる。そうだ、これは点描派の網だ。しかし時間的な点描派である。網の目に露がかかって虹の色に輝く。

「……塔のように真直ぐな橡（とち）の樹影……」塔のように真直ぐな橡は、コレヂの初めての夏休みに少

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo